

# 米国教育視察報告

～バージニア州・メリーランド州の教育事情と地域社会活動から学んだこと～

沖縄県具志川市立具志川小学校教諭

嘉納 英明

## 1. はじめに

私は、平成10年9月16日から12月14日までの3ヶ月間、文部省の日米国民交流・若手教員米国派遣のプロジェクトにより、バージニア州並びにメリーランド州に派遣された。このプロジェクトの目的は、日本の若手教員（およそ35歳未満）を米国に派遣し、米国の学校、教育関係機関における交流活動、一般の家庭での滞在、地域社会活動への参加をとおして、米国と日本との相互理解に資することを目的として、昨年度から実施されているものである。今年度、全国から推薦・応募された中から182名の小中高の教員が選考され、私が派遣されたバージニア州を含めて、コロラド、イリノイ、ミシガン、ミズーリ、オハイオ等、全米九つの州に派遣された。各州への派遣は、1団につき20名程度で構成された。沖縄県からは、私1人であった。旅費、滞在費等に要した費用は総額300万円に及んだが、文部省と沖縄県からそれぞれ110万円の補助があったため、自己負担金は、80万円となった。

大金を費やしての海外研修ではあったが、パック旅行では経験できない研修内容が盛り込まれていたため、トライすることにした。幼少期にアメリカ世を過ごし一沖縄の日本本土復帰（1972年5月15日）の時、私は、小学校3年生であった一、現在、教職の立場にある私にとって、今回の教育視察を中心とした米国派遣は、当初から大いに期待するものであった。

## 2. BUCKINGHAM COUNTYとDILLWYN PRIMARY SCHOOLについて

バージニア州都のリッチモンドの滞在先で、ホームステイ並びに学校研修に必要な事項について、4日間、まさに缶詰研修といえるほどの集中講義を受けた。主宰したのは、メリーランド大学教育学部内に設置されている、MARJIS(Mid-Atlantic Region Japan-in-the-Schools Program, 責任者-Dr. Barbara Finkelstein教授)である。米国の歴史や文化の概要、人種構成と言語問題、マイノリティーの問題、ホームステイ中の注意事項、タブーの話、現地校における授業実践の事例研究等、興味の尽きない内容ばかりであったが、ハードな内容に、最終日には、さすがに疲れたものである。研修後、いよいよ1ヶ月間のBUCKINGHAM COUNTYにおける生活がスタートした。

私が滞在したCOUNTYは、リッチモンドから西へ約60マイル（約100キロ）、バージニア州のほぼ中央部に位置している。ジェームズ河とアポマトックス河に挟まれ、

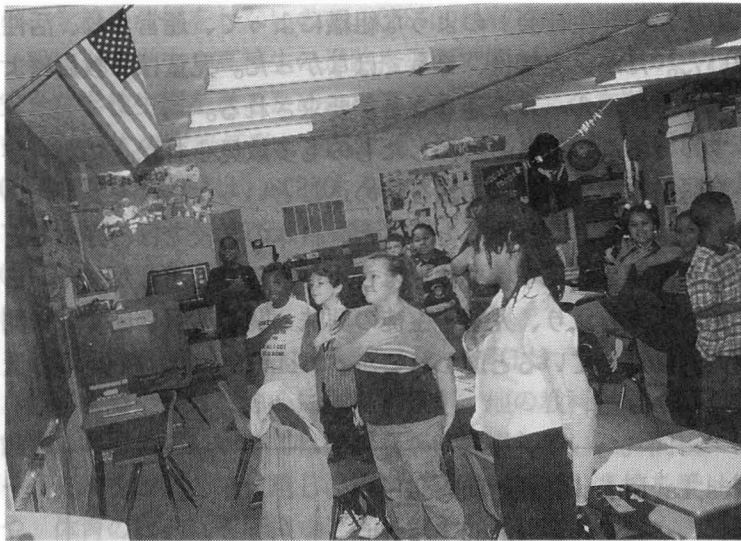
面積は約1500平方Kmと広いが、人口12000人の長閑なCOUNTYである。主要な産業は林業と牧畜、特産のスレート製造ぐらいであり、住民の多くは近郊の都市やCOUNTY内にある2つの刑務所職員として通勤している。住民の平均収入はバージニア州の他のCOUNTYと比較しても低いといわれ、そのため、財政事情は厳しく、教育の条件整備においてもその影響がみられた。例えば、それは、学校の施設・設備の不足や老朽化であったり、教員の給与の低さに端的に表れた。一般に、教員の給与は、教員を雇用しているCOUNTYの財政事情に依存しているのであるから、COUNTYが異なれば、教員の給与には、当然、差が出てくる。連邦政府の担当官の話によれば、財政事情が厳しいCOUNTYにおいては、教員が、高給を得るために転職したり（特に、若手教員）、財政基盤が強固な都市部や他のCOUNTYに移動希望が多いという。同じバージニア団の日本人教員の話によると、数は少ないとはいえ、教員の中には、週末、生活費を稼ぐためにレストランや売店でアルバイトをしている者もいるという。

さて、BUCKINGHAM COUNTYには4つの小学校と中高各1校、計6校の公立学校があった。私が1ヶ月間お世話になったDILLWYN PRIMARY SCHOOLは、幼稚園から3年生までの児童330余名の小規模校である。教職員は、学校長を含めて圧倒的に女性が占めていた。DILLWYN PRIMARY SCHOOLは、以前、WHITE SCHOOLであり、隣校のGOLD HILL ELEMENTARY SCHOOLは、BLACK SCHOOLであった。公民権運動以後、強制バス通学により、DILLWYNは、BLACKの児童を受け入れ、GOLDは、WHITEの児童を受け入れることにより、双方とも混合された学校になった。ところが、混合が強制的に図られたため、GOLDの近郊に住むWHITEの家庭から、「なぜ、もともと、BLACKの学校であったGOLDに、われわれWHITEの子どもが行かなければならないのか？」という不満が渦巻き、DILLWYNへの転校手続きが相次いだ。そのため、GOLDの在籍児童が急減し、教育委員会が調整に乗り出したこともあったという。南部の州では、よく見られたことではあったというが、米国における人種差別の問題の根深さを垣間みた思いであった。

### 3. DILLWYN PRIMARY SCHOOLの1日

DILLWYN PRIMARY SCHOOLの通学区は広範囲であるため、児童は、スクールバスまたは自家用車に乗って登校する。学校に到着すると、まずカフェテリア（食堂）にてクラス別に着席し、欠食児童のために朝食が準備されている。この朝食に係る経費の一部は、連邦政府の補助金である。朝食を終えた頃、担任は、自分のクラスの児童を教室まで引率し、学級事務連絡や宿題の点検をする。それが終わると、8時40分、学校長の校内放送が始まる。

まず、①学校長の合図で、右手を胸にあて、国家への忠誠を誓う、“PLEDGE TO THE FLAG”を暗唱する（「PLEDGE TO THE FLAG」を参照）。次に、②今日の出来事、トピックスの紹介、③各学級の出席率の紹介をして終了となる。毎朝、全児童が、国家（国旗）へ忠誠を誓う光景を目の当たりにすると、なんともいえない気分になったが、



多民族・多文化国家である米国にとって、幼少期から“国家”を意識させることは、重要な教育的指導だと考えられている。また、当初、なぜ、出席率まで発表するのか、疑問に思ったものだが、同州がSOL (Standards of Learning) という州統一テストを毎年春に実施し、各児童の学習到

↑国旗に向かって「PLEDGE TO THE FLAG」

#### PLEDGE TO THE FLAG

I pledge allegiance to the flag of the United States of America and to the Republic for which it stands, one Nation under God, indivisible, with Liberty and justice for all.

達度を測っているため、学校（学校長）は、学習内容の定着を図るうえからも出席率については、常に関心を払っていた。ちなみに、BUCKINGHAM COUNTYのSOLのスコアは、概して低いため、教育委員会からスコアを上げるよう、各学校に指導がなされ、学校長も職員会議でテスト結果の分析と対応のあり方を職員に説いていたことが印象に残っている。SOLについて学校長に質問した時、「テスト前になると校長も、教職員も、神経がピリピリしてくるのよ」と苦笑いしていた。

学校長の校内アナウンスが終了すると、第1時間目が始まる。各学級の時間割は、日本のそれが毎日時間割りが異なるのと比べると、ここの学校の時間割は、毎日、ほぼ同一の内容となっている（「Mrs. Layton's Class Schedule」を参照）。授業時間は、およそ30分と、スケジュールには書かれてはいたが、MathやReadingの時には、1時間に及ぶことも度々あった。また、最も驚いた点は、子どもや教員にとって、休み時間が確保されていないことであった。1日に1～2回、BathRoom Breakの時間が設けられ、担任の引率のもと、児童は廊下に一列に並び、指示に従って一人ずつトイレに入る。もちろん、トイレに行きたくない児童がいるはずであるが、それにはお構いなしである。BathRoom Breakにしても、給食時間にしても、児童は、教員の徹底した指導・管理の下にあり、自分勝手な行動は、厳しく注意される。

渡米前、米国の学校は、テレビドラマや映画のワンシーンのように、児童・生徒は

自由を満喫し、学校行事もまた、「生徒会」のような組織によって、運営され、活性化しているものと考えていた。だが、実態は、そうではなかった。児童は、教員により徹底した管理下におかれ、学校のルールを守ることが要求される。

学級の掲示物は、カラフルであり、教員の自作したものも多数見られた。だが、学級における指導方法は、教科書中心であり、知識を詰め込むといった感じを受けた。学級内で班討議をしたり、班活動をしたりするといった、日本の学校では、好んでとられている教育方法も、私が配置された学校では、ほとんどみることがなかった。日本の教員は、授業の導入を一工夫したり、児童・生徒の興味・関心を引き出す教材開発や発問の研究等を、精力的に進めていると思われるが、DILLWYNでは、教員の力量を高め合う校内研修会等はなかった。

#### Mrs. Layton's Class Schedule

8:15 - Free Time	12:30 - Math
8:40 - Announcements	2:00 - Review Bathrooms
calendar time	2:15 - Recess
9:00 - Story Time	2:45 - Pack up time
9:30 - comprehension	2:50 - Bell Prepare for Home
phonics	
10:00 - Reading	ART - Tuesdays 8:50
10:30 - Journals writing	Music - Wednesdays 12:15
11:00 - Unit time	P.E - Thursdays 12:55
11:40 - Bathroom Break	Library - Mondays 1:00
11:45 - Lunch	Guidance - Some tuesdays 9:35
12:15 - Bathrooms Quiet Time	

主に授業を担当する教員以外にも、学校には、多くの職員がいた。なかでも、教員の教科指導を助け、児童のしつけ面までの責任を負うTeacher's Assistant（通称、AIDE）は、6名いた。彼女らには、特に、教員免許状が必要とされているわけではなく、1年間の期限付き任用である（再任は妨げない）。優秀な児童には、教育委員会派遣のTALENTED AND GIFTED COORDINATORと呼ばれる教員が週に数回、個人的に指導をする。GIFTEDが配置されたのは、3年前からである。GIFTEDは、COUNTY内の小学校と中学校の優秀な児童・生徒を教育指導し、高校では、ハイトレントの生徒を大学レベルのカリキュラムが準備されているガバナースクール（マグネットスクール）に送る職務を担っている。学習遅滞児には、LD(Learning Disabled)教員が指導していた。その他に、CUSTODIANとGUIDANSE TEACHERがいた。CUSTODIANは、学校の環境整備の仕事、校舎や教室内外の清掃に至るまで一手に引き受けている。米国の児童・教員

は、学校の清掃をしないので、CUSTODIANの存在は貴重である。GUIDANSE TEACHERは、一般に、中学生や高校生の進路指導面で関わってくるが、小学校においては、週1回、安全な学校生活を送るための指導であるとか、交友関係の大切さ等を指導内容としている。日本の学級活動の内容に近いものがあった。GUIDANSEの授業を観察した日、GUIDANSE TEACHERは、SCHOOL BUSの利用の仕方をビデオを交えて指導していた。授業では、①バスの待ち方、②運転手さんへの挨拶の仕方、③バスの乗り降りの仕方、④バスの中でふざけない等、バス利用のあり方について児童の体験をもとに、話し合い活動を進めていた。

先にふれたSOLテストの影響のため、担任は、Reading、Math、Social Studyのテスト教科については、熱心に指導するが、他の教科、例えば、図工や音楽、体育等の技能系の教科指導については、明らかに軽視していた。同校には、図工室はなく、スクールバスを改造して代用し、担当の図工科教師も3校を受け持っていた。これは音楽や、体育の場合にも同様なことがいえた。音楽室はなく、教員が持参したCDプレーヤーの音に合わせて歌ったり、踊ったりする程度の内容であった。体育の時間も、教員が用具、例えば、ボール1個を持参してきて、サッカー・ベースボールを楽しむといった具合である。Reading等の主要教科が長時間の授業であることに對し、これらの教科の授業は、20～30分程度であった。

午前中の授業が終了すると、カフェテリアに移動して給食の時間である。給食は児童にとって最も楽しい時間のはずであるが、食事中、厳しいマナーが要求される

(「CAFETERIA RULES」を参照)。教員は、

#### CAFETERIA RULES

1. USE A QUIET VOICE
2. CLEAN UP YOUR MESS
3. KEEP HANDS AND FEET TO YOURSELF
4. LISTEN TO THE ADULTS !
5. USE GOOD TABLE MANNERS, BE COOL, FOLLOW THE RULES !

カフェテリア内で食事をするが、児童のテーブルとは区別されている。教員の食事中、児童の世話をするのは、AIDEである。カフェテリア自体が小規模なので、各クラスの昼食時には時間差があった。基本的に下の学年から引率されてきて、給食をとる。児童は、バイキング方式で一品ずつ料理をトレイにのせ、ランチチケットのチェックを調理員から受けて初

めて食べることができる。このランチチケットは、1枚で20回利用することができる(1枚20ドル)。但し、教育委員会で認定された低所得層の児童は、無料でチケットが配られることになっている。児童や教員の中には、給食をとらずに弁当をもってくる人もいたが、それは認められている。

午後の授業(1コマ)が終了すると、児童は、カフェテリアに再度集合し、バスを待つ。朝、登校したときには、各学級毎に着席していたが、下校の場合は、バスの行き先毎に整列して放送を待つのである。AIDEによる学校到着のバスの番号が次々と読



み上げられると、児童は、バスに乗り込む。黄色のスクールバスの運転手には、退職者や主婦が採用されている。

児童が下校すると、教員は、翌日の準備をしたり、週1回の職員会議（およそ30分程度、連絡事項が主たる内容）を終えて、4時までには、ほとんどの教員が帰宅する。日本の教員が、午後6～8時まで居残り、教材研究や部活動の指導をしていると聞いたDILLWYNの教員は、「いつ、日本の教員は、自分の時間を確保するのか?」と、怪訝そうに質問してきた。ここの教員は、仕事としての教職とプライバシーとしての家庭生活を峻別しているため、家庭で過ごす時間を削ってまで、教員が、部活動の面倒をみるというのは稀である。部活動の世話をするのは、地域の父母と決まっている。

以上の学校観察からいえたことは、学校・学級の規律（ルール）が重視され、児童はそれを順守することが求められていた。換言すれば、児童は教員によってかなり管理的に指導されていた。また、学校には多くの教職員がみられたが、各自の職務内容が分業化され、それにともない責任も分散しているかのようにみえた。

#### 4. Mrs. Branchの教室経営と授業観察

私のHOST TEACHERは、教職20年目になるMrs. Branchであった。3年生担任の彼女は、COUNTYの教育財政が厳しいため、冷房完備とはいえ、移動用トレーラーハウスの中で授業をしている。学級の児童は、17名であり、8名はBlackの子である。教室には、国旗とCLASSROOM RULESが、ひときわ目立つ位置に掲げられている。

##### CLASSROOM RULES

1. Be Polite
2. Raise your hand
3. Work quietly and do your own work
4. Keep your hands and feet to yourself
5. Walk at all times

教室には2台のパソコンとOHP、テープ・レコーダー、図書資料等、基本的な教具は、準備され、効果的に使われていた。

算数の授業を観察したが、担任の説明に対して、挙手をさせたり、一斉に声を出させて答えあわせをさせるところは、日本の教員の指導と似たようなところがあった。Mrs. Branch以外の授

業でもそうだったが、教員は、児童にノート指導というものをするわけでもなく、いかにノートを使おうと児童に任せきりだった。そのうえ、日本では、国語の漢字練習や算数の計算ドリル等、習熟しなければならない事項については徹底したドリルとテストを課すことがあるが、ここでは習熟の時間が十分とられているわけではなかった。

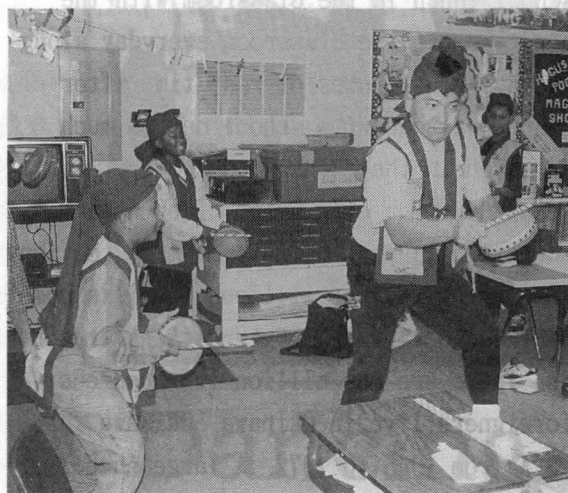
概してDILLWYNの教員は、指導方法や教育内容についてお互いが研究し高め合うというようにはみえなかった。実際、Mrs. Branchに聞いても、日本の学校で盛んな研究授業や教材開発等は皆無に等しく、指導方法は個人に任せられているということである。確かに、1ヶ月間、学校観察をしても教員相互が学び合う時間が確保されている

わけではなく（職員室自体がない）、指導案なるものもみたことがないという教員が多かった。

## 5. DILLWYN PRIMARY SCHOOLにおける授業実践

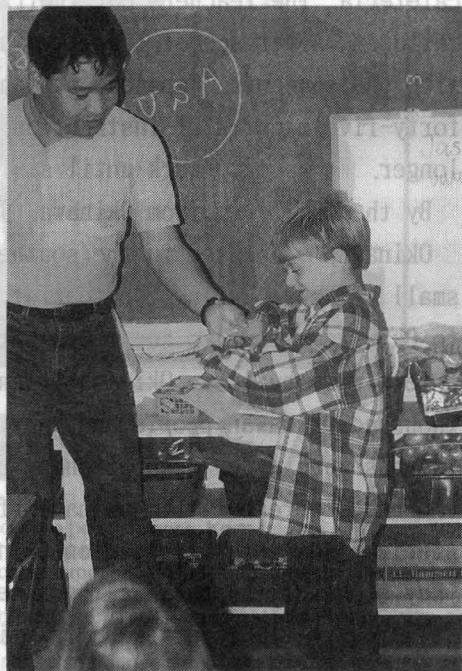
授業観察と平行しながら、日本語の挨拶やひらがなの紹介、折り紙の楽しみ方、玩具紹介、日本硬貨（1円、5円、10円）の紹介、そして、沖縄の民舞であるエイサーの披露と指導をした。授業をするにあたって、まず、同校の児童が園児から3年生までなので、高度な学習内容は避けた。例えば、園児と1年生への折り紙の指導では、数回の折りで出来上がる“Dog”であったり、2年生から3年生の授業では“Kabuto”であったりした。特に、児童の関心を引き出した授業は、玩具の紹介であった。凧、コマ、ベーゴマ、紙風船、ヨーヨー、剣玉等の遊び方を教え、自由に遊んでもらうと、児童は、はしゃぎながら日本の玩具に挑戦した。

また、児童にとって、最も印象深かったものとしてはエイサーを観たことと、実際に踊りに挑戦したことであろう。渡米前に1曲分のエイサーの振り付けを習得した私



↑ 児童とエイサーを踊る

沖縄の玩具の紹介→



は、パーランクー5個と衣装5人分を持ってきていた。まず、3年生の学級で私が“ミルクムナリ”を舞い、今度は、児童4人と一緒になって演じた。初めて沖縄の民族衣装を着た児童は、興奮を隠し切れず、また、パーランクーを手にとると、パンパン叩いて音を楽しんだ。学校の授業でエイサーを演じたことが教育委員会にも伝わり、それで新聞社（「THE FARMVILLE(VA.) HERALD」1998年11月11日）とTV局の取材（1998

年10月16日午後6時放映、「DATELINE 29 NEWS」)を受けた。学校研修の最終日には、カフェテリアで全体集会が持たれたり、PTA総会の出し物で児童と共に演じるようになった。私は、その総会でエイサーを演じる前に、自己紹介があったので、チャンスとばかりに沖縄の紹介も兼ねることにした。以下は、そのときの自己紹介文である。

My name is Hideaki Kano. I am an elementary school teacher. I teach sixth grade in Japanese school now and have been a teacher for ten years. I enjoy teaching every day.

Before we came to the U.S.A. we thought it was a dangerous place for foreigners, but we have found that Buckingham County is very safe for all Japanese teachers. I have been in the U.S.A for one month and it is our first visit to the United States. We have enjoyed our visit.

The school system are very difference here. We do not have breakfast or school buses. We eat school lunch in our classrooms. We do not have a cafeteria. The teachers eat their school lunch in the classroom with the children. After school lunch, we have to clean the classroom everyday along with the students. Japanese students have ten minutes of rest time after forty-five minutes of instruction. Japanese teacher's school day is much longer. We have to work until six or seven in the evening usually.

By the way, I am from Okinawa, Japan. Have you ever heard of Okinawa?

Okinawa is located in the southern part of Japan. Okinawa consists of many small islands. During the tourist season, about four millions tourists come to Okinawa a year to see the sights or to go swimming. International resort hotels were built in Okinawa islands. There are one million two hundreds thousand Okinawan people and many foreigners live in Okinawa. Okinawa islands were under occupation by U.S.A from 1945 to 1972. A large number of U.S bases were built in Okinawa, for instance, KADENA and FUTENMA. Many American soldiers are stationed in Okinawa. Sometimes Okinawa is called the "Key stone of the pacific" because of its strategic military location.

There are elementary schools, middle schools, and high schools on the military bases in Okinawa. The bases also have about four Universities. At present, Okinawan people can go to the Universities on base if they succeed in entrance examination.

I think Okinawa is exciting islands. Some of the characteristic cultures are Okinawa music, language, dancing, and so on. Here, I show you Okinawan dancing. We say "EISA". EISA is most popular dancing in Okinawa. From the



first, EISA dance was held for the ancestor in August every year. But now, young people dance EISA on special days. for example, a wedding present or festival, and so on.

バージニア州のCOUNTYで、沖縄の紹介が出来たことが何よりも嬉しく、また、児童と共にエイサーの踊りをとおして、沖縄の文化を少しでも伝えることができたのではないかと考えている。

「THE FARMVILLE(VA.)HERALD」1998年11月11日

6. 地域社会活動に参加して～メリーランド州のService Learningを学ぶ～  
1ヶ月の学校研修後、メリーランド州に移動した。州立メリーランド大学のカンファレンス・センターで滞在しながら、3週間余、米国のボランティア活動について学

ぶ機会を得た。だが、われわれがいうところのボランティア活動とメリーランド州で実践されているボランティアとは、意味も形態も微妙に異なるものであった。

ボランティア活動研修を主宰しているMARJISによると、ボランティアとサービス・ラーニング、コミュニティ・サービスは、それぞれ異なるものであるという。ボランティアは、日本で考えられているものとはほぼ同じ意味であるが、米国では、制度化されたボランティア組織があり、そこで、給与を得ながら従事する者も多数存在する。日本では、ボランティアとは、奉仕的な意味合いが強いが、ここでは、ボランティアが職業として確立していることにまず驚いた。次に、サービス・ラーニングとは、学校のカリキュラムの中に位置づけられているものである。特に、同州では、1992年から高校卒業までの一定期間、非営利団体でボランティア活動に従事することが義務付けられ、“ボランティアの学び”をすることが求められている。コミュニティ・サービスとは、罪を犯した者が、一定期間、ボランティア活動をとおして地域社会へ貢献することを指す。そのため、学校では、用語としても実践的にも使われることはない。

メリーランド州内の中学校や高校におけるサービス・ラーニングの実践を直接、参観する機会を得たが、実践の内容は様々であった。老人ホームの慰問であるとか、動物保護施設における動物の世話であるとか、あるいは、地域社会における特定の調査をとおして、問題の所在を明らかにし、これを地域へ還元することもサービス・ラーニングとしてとらえられていた。

学校で取り入れられている、サービス・ラーニングは、PARE(PREPARATION、ACTION、REFLECTION、EVALUATION)の段階を経ながら実践されている。まず、PREPARATIONは、生徒にサービス・ラーニングの意義や目的を理解させ、活動に必要なことを準備させることを意味し、次のACTIONでは、行動(実践)の日時、場所、活動内容を把握させることに重点がおかれる。REFLECTIONは、行動(実践)に意味があったのか、効果はあったのかを反省する。最終のEVALUATIONは、評価と呼ばれるもので、当初の目的は達成されたのか、準備は妥当であったのか、次のサービスをどのように計画すればいいのかを生徒自身に考えさせる機会である。学校のカリキュラムに位置づけられているサービス・ラーニングだが、留意点としては、①学校のカリキュラムの中に位置づけるのであるから、子どもの視点から構成されなければならない、②サービス・ラーニングは、地域社会との関わりの中でどのように進めていくべきかが常に検討されなければならない、③生徒が地域社会に貢献できるプログラムを作る必要がある、以上の三点である。

Dr. Barbara教授は、以上のサービス・ラーニングの体験により、生徒が社会的な弱者を理解し、他者への思いやりの心情が芽生えてくるものだと言説した。確かに、サービス・ラーニングの教育的な効果は、Barbara教授の指摘する通りだと思う。だが、連邦政府や州政府が当然保障しなければならない福祉制度を、民間活力(ボランティア)によって支えられている米国社会の不安定な一面をみた思いである。

## 7. ホームレスの人たちへのボランティア

MARJISによる理論研修と学校視察から学びつつ、われわれ派遣教員は、実際のボランティア活動に従事した。その中で最も印象に残っているのは、ホームレスの人々への朝食の準備と提供であった。大都市では、ホームレスの問題は深刻であり、冬季になると、凍死してしまう者もいる。それで、ボランティア団体としては、民間の会社やレストラン、ホテルから要らなくなった衣料品や、賞味期限の切れた食品（チキン、ピザ、パン、ケーキ類）を取り寄せ、これらをホームレスの人々に提供しているのである。その量は膨大であり、多くのスタッフの手により、ホームレスの人々の空腹を満たしている。

ある日、ホームレスの人々への食事を提供している民間のボランティア団体に出かけた。目的は、朝食の準備とその提供である。専属のスタッフと共に、大きな鍋にチーズがたっぷり入ったスープを作り、電子レンジでピザやパンを温め、ジュースの準備をして飢える人々を待った。定刻の7時になると、一人また一人と、空腹を満たすためにホームレスの人たちが続々とやってきた。6：4の割合で、Blackの人が多く、女性は、1割程度であった。彼らは、小奇麗であり、礼儀正しかった。

見慣れない東洋人が入り口で立っていたのが気になったらしく、しばらくして初老の男性が私に声をかけてきた。最初、その男性は、「どこから来たのか?」「ここで何をしているのか?」等と親しげに話しかけてきたが、次第に真剣な顔つきになり、次のようにホームレスのことについて語りだした。「お前たち日本は、アメリカに戦争で負けたのに、今では、トヨタとか、ニッサンとか、沢山の自動車を持って金持ちになっているじゃないか。アメリカは戦争に勝ったのに、俺たちみたいなホームレスが沢山いる。要するに、アメリカは、海軍とか陸軍とか、軍隊が好きでそこに金をかけているので、俺たちには、金が回ってこないんだ」と。

米国は軍事に莫大な費用をかけているが、教育や福祉予算は緊縮型であると聞いていたので、初老の男性の説明に妙に納得してしまった。世界一の軍事力を持ち、スペースシャトルを打ち上げる米国の威信を感じながら、ボランティア団体の世話になっている多くのホームレスや貧困層のおかれている現状をみる時、アンバランスな社会構造がみえてきた。

## 8. 日本人（語）補習校の参観

在米の日本人主婦から、カンファレンス・センターの近郊に日本人（語）補習校があることを聞き、MARJISをとおして、単独で参観する機会を得た。ワシントンDCの近郊にある補習校は、1校であり、それが4つの地区ごとに分かれている。ワシントンDCには、1～3年生が通う学校、4～6年生が通う学校及び中学・高校の学校、そして、バージニア州にもワシントンDCに近接して1校存在している。補習校には、総計500人の児童・生徒が在籍し、文部省派遣の3人の教員と現地採用教員31名が指

導にあたっている。現地採用の中には、教職経験者もいるが、主婦や教職未経験者も多数採用されている。児童は、平日は、現地校に通うが、土曜日に補習校に通い、日本の授業に準じた内容を学習している。派遣教員3名は、平日は、ワシントンDCにある日本大使館の一室を借用して事務管理に従事し、毎週土曜日に、4つの分校を管理運営している。実際に、授業をするのは、現地採用教員である。補習校は、父母代表19名から構成される運営委員会の管理下におかれ、同委員会は、教員の採用やカリキュラムを実質的に決定する機構である。

私が訪問した補習校は、文部省からの補助金と児童（父母）の納める授業料で運営されている。各学期毎に1人250ドルの授業料と教材費30ドルを納めるため、1年間におよそ840ドルを納めていることになる。こうした補習校があるのは、1～2年間の短期駐在の父母からの要求があるからである。近い将来、帰国するのであるから、日本の学校に適応させるための準備を補習校に求めている、というわけである。

訪問した当日、日本から私立学校教員3名と日本人学校ロスアンジェルス校の教員1名によるパネルディスカッションが開かれていた。ディスカッションで問題となっていたのが、日本での受け入れ問題、すなわち、帰国子女問題であった。

パネラーが所属する私立学校は、帰国子女に対して門戸を開いており、ユニークな学校経営をしているが、フロアからは、「絶対数の公立校では、帰国子女の受け入れ体制は十分ではなく、いじめ問題も確実にある」という現状の厳しさを指摘する声もあがった。このパネルディスカッションでは、帰国子女の受け入れに関する問題の深刻さが指摘されたが、現状を打開する方向性までは見いだすことができなかった。

ここで、補習校訪問を終えての感想をメモ程度に書き出してみた。

- ①補習校に対する文部省と外務省からの補助が十分でないため、父母の負担が大きい。
- ②教会学校（私立校）を借用しているため、賃貸料が高く、学校の財政を圧迫している。公立校を借用しようとしても管理・安全面の不安からか、教育委員会から許可が出ない。
- ③児童の帰国を前提とした日本語と教育課程（カリキュラム）の保障が十分でない。

## 9. 補習クラスでの飛び入り授業

補習校の6年生の教室に招かれ、32名の児童が一人ずつ自己紹介してくれた。担任は、大阪府内で教職経験のある女性であった。結婚後、米国へ移住し、現地採用されたという。担任の「沖縄について知っていること、ありますか？」の質問に、児童は、次々に答えてくれた。「さとうきびやパイナップルがたくさんとれる」「アメリカ軍の基地がある」「アムロやSPEEDの出身地である」「台風が多いため、家の造りも木造ではない」「九州の南の方にある」「アメリカ人がいっぱいいる」「ナハという大きな町がある」等。日本本土の児童も、この程度の知識を持っているだろうか。確かに、小学校4年と6年の社会科の授業で沖縄のことを学習するが、本当に知識と

して定着しているな、と感心した。

担任に促され、児童の質問に答えたりしたが、ついには、沖縄の歴史について授業をすることになった。要点としては、①かつて沖縄は、琉球という独立王国であったこと、②薩摩の侵略により日本国の一県として位置づけられたこと、③太平洋戦争では激戦地となり、戦後、米軍の占領下におかれたこと、④1972年5月に沖縄は日本に返還されたこと、等であった。児童は、興味深そうに聞いていた。

突然の飛び入り授業で、教材の準備をしないままの授業だったが、米国で生活している日本人の児童に授業をするという貴重な経験を得た。

#### 10. メリーランド大学教育学部の講義への参加

大学の授業に興味があったので、MARJISに打診した。幸いにも、TEACHER'S HISTORYを受講することができた。この講義は、ディスカッションやディベートの練習をする場と聞いていたが、1週間前に受講した教員の話によれば、ルールに則ったディベートでもなく、ただ教育についての私見を述べ合うだけの議論の場だったという。しかも、学生と対等に議論するだけの語学力を有していない日本人教員にとっては、大変苦痛だったようだ。というのは、学部学生から、「原子爆弾を広島と長崎に落としたのは、戦争を終結させるためには必要だった!」「君たち、日本人教員は、米国の教育から何を学び、何を日本に導入したいのか?」「日本人は、質問されても答えきれない。議論が苦手だ」等、高圧的な態度に閉口したようだ。私は、大学の授業に出席するからには、前もって質問事項を準備し、積極的に講義に参加する方がより実りのあるものになると考え、前日、他のメンバーに「勉強会」を提案した。

当日、「勉強会」は、決して無駄ではなかった。むしろ、質問事項に至っては、見事にヒットした。講義担当の教授は、ゲストに6人の日本人教員がいること、ビデオの視聴をとおして講義を進める旨を説明した。ビデオは、黒人差別のものであり、1本6分のビデオを4本視聴し、ディスカッションするものであった。ビデオ視聴の前に、教授は、「日本には奴隷制度がなかったよね」と確認し、スタートボタンを押した。

ビデオの内容は、①Blackの大学生が、警官に護衛されて通学しているシーン(Whiteの学生に妨害されるため)、②WhiteとBlackの児童を強制的にバス通学によって混合させるシーン、③“I HAVE A DREAM”で有名なキング牧師の運動、④公民権運動の高揚期のシーン、以上であった。ビデオ視聴後、教授から質問やディスカッションをしたいことはないかと聞かれた。前夜の「勉強会」で、米国における黒人差別のことについて質問したいと考えていたので、積極的に拙い英語で質問をした。

質問の内容は、①米国には黒人差別が過去にあったし、現在でもあると思う。君たち学生は、近い将来教員となるのだから、黒人差別を子どもたちにどのように教えるのか、②バージニア州の学校では、確かに、WhiteとBlackの児童が同じ教室で同じ教



科書を使い学習していたが、放課後は、WhiteはWhite、BlackはBlack とだけしか交流しなかった。父母の交際も同様である、これをどう考えるか、③差別のあった歴史について教員がきちんと学習する必要があるのではないか、以上の3点である。私の質問に正面から答えてくれた学生はいなかったが、ある女子学生は、感想として次のように述べた。「米国に差別がまだあることは確かであるし、私たちがもっと差別について考えなければならない」と。

講義の最終ではフリー・トーキングの時間となった。それで、日本の教育事情を紹介するのも意味のあることだと考え、日本の教員の現況について、語った。日本の教員は比較的、教材研究をするといわれ、また、公開の研究授業や教材開発に関する出版活動も精力的に行っていることを述べた。さらに、米国の教員も教育方法学について、校内の研修会等で討議する必要があるのではないか、とコメントした。70分の講義はアッという間に終了した。

講義を受けての感想としては、リッチモンドでの事前研修会では、黒人差別の話はタブーであると聞かされていたが、大学の講義で取り扱われていることに正直言って驚いた。学生にとっては、差別の歴史を持ち、現在も差別の残る自国で生活していることをあらためて考える機会になったようだ。

## 11. おわりに

戦後、日本と米国は、日米安保を基軸にした関係が構築され、日本政府が外交上最も重視しているのが米国との関係であることは疑いない。沖縄にとっては、戦後27年間の米国占領、米軍基地問題等で、米国との間で緊張関係がみられるが、米国による長期占領ゆえの影響を少なからず受けてきた側面も見逃せない。例えば、コザ（現在の沖縄市）のハード・ロックバンドは、アメリカ世でなかったら生まれてこなかったであろうし、毎年、米国の独立記念日に開催されるカデナ・カーニバル（於、嘉手納基地）は、沖縄が米国の占領下にあった時から開催されているものであり、現在でもその時期になると、多くの県民が押し寄せ、普段、立ち入ることができない基地内を見学することができる。このように、沖縄でも、米国を感じることができるが、今回、米国本土に渡り、一般家庭で生活しながら、直接、肌で米国の社会と学校を感じ取ってきたことは、貴重な経験だった。

研修を終えた今、米国はあまりにも広大であり、地方分権が進んでいるため、いろんな表情を併せ持っているのではないかと、というのが率直な感想である。また、意外にも、OKINAWA が多くの人々に知られていることに驚きと戸惑いを感じた。OKINAWA は、米国民にとって、日本の一部であるには疑いないが、特殊な地方であるという認識が一般的ではないか。今回の研修により、沖縄と日本、米国との関係をあらためて考え直すことになりそうだ。